

表 1. 日本に分布するリス科動物.

和 名	学 名	中 国 名
ムササビ (ホオジロムササビ)	<i>Petaurista leucogenys</i>	日本鼯鼠
ニホンモモンガ	<i>Pteromys momonga</i>	日本小鼯鼠
タイリクモモンガ (エゾモモンガ)	<i>Pteromys volans</i>	歐亞大陸小鼯鼠
ニホンリス	<i>Sciurus lis</i>	日本松鼠
キタリス (エゾリス)	<i>Sciurus vulgaris</i>	歐亞紅松鼠
シマリス (エゾシマリス)	<i>Tamias sibiricus</i>	西伯利亞花松鼠

表 2. 台湾に分布するリス科動物.

和 名	学 名	中 国 名	形 態 的 特 徴
オオアカムササビ ^{注1)}	<i>Petaurista petaurista</i>	大赤鼯鼠	背部は暗赤色, 胸腹部は黄褐色を帯びる.
カオジロムササビ	<i>Petaurista alborufus</i>	白面鼯鼠	背部は暗赤色, 胸腹部は鮮やかな白色である.
ケアジモモンガ	<i>Belomys pearsonii</i>	台湾小鼯鼠	背部は茶褐色, 胸腹部は白色~淡黄色を呈し, 手足 (特に足の甲の部分) が短毛で覆われている.
タイワノリス ^{注2)}	<i>Callosciurus erythraeus</i>	赤腹松鼠	背部は暗灰色で, 胸腹部の色は灰色または暗赤色を呈するが, 暗赤色の占める面積に地域変異が認められる (林良恭・陳彦君による本特集記事参照).
オーストロンカオナガリス	<i>Dremomys pernyi</i>	長吻松鼠	背部は暗灰色, 胸腹部は黄褐色を帯び, 吻部が長い.
タイワノホオジロシマリス	<i>Tamias maritimus</i>	台湾條紋松鼠	背部に3本の黒色の縞模様を持ち, 外観はシマリス <i>Tamias</i> に類似している.

注1) 台湾のオオアカムササビは, 近年, インドムササビ *Petaurista philippensis* の一種として分類されているが, ここでは馴染みの深い旧分類体系を採用した. 特集記事の中では, 必要に応じてインドムササビの名称を用いている論文もあるが, この場合は, 文章中に注釈が施されている.

注2) *Callosciurus erythraeus* に相当する和名はクリハラリスが妥当であるが, 台湾産の本種は慣用的にタイワノリスと呼称されているため, 本特集記事では和名をタイワノリスに統一した. タイワノリスという和名は, 本来は *Callosciurus caniceps* に対して使用されているものであり, 今後, クリハラリス・タイワノリスという和名の定義を明確にする必要がある.

ところで、会議を通して私が最も強く感じたことは、リス類についての両国間での認識のズレである。日本側研究者がリス類を生物学的な研究対象としてのみ捉えているのに対して、台湾側研究者の半数以上の方は、これらを植林に被害を与える厄介な害獣であると見なしており、そのための対策が一番の興味・研究テーマとなっているのである。日本においても、かつてムササビが植林に被害を与える害獣としてクローズアップされたことがあるが、台湾の比ではない。したがって、純粋な生物学的見地から、まだまだ台湾のリス類には未知の部分が残されており、今後の非常に興味深い研究対象であると言えよう。

もう一つ会議の場において感じたことは、台湾の若手研究者、あるいは学生・院生の方々の熱気である。今回の参加者総数は150名であったが（この参加人数は台湾の生物系シンポジウムでは過去最大規模のものだそうである）、その多くを占めていたのは台湾の若い方々であった。今後の台湾の哺乳類学がこういった若い方々によって着実に担われ、さらに大きく発展することを心より願いたい。

会議が終了した後、台湾中部の溪頭にある国立台湾大学演習林まで移動し、一晩のみではあるが、日台合同のムササビ観察会を行った（この観察会にも80名もの台湾の学生・院生の方々が集まった）。この日は残念なことにムササビの姿を確認することは出来なかったが、かわりに、滅多に観ることの出来ないケアシモンガ *Belomys pearsonii* を観察することが出来た。この後さらに二晩、日本側のメンバーのみでムササビの調査を続け、オオアカムササビ *Petaurista petaurista* の姿を何度も観察することが出来た。

今回の会議、そして観察会・野外調査を通して得られた学術的な収穫は、日本・台湾両国にとって非常に大きなものであったと思う。そしてこれを一つの機会として、今後は日本と台湾のみにとどまらず、アジアの多くの国々をも含めたリス・ムササビ類研究に関する学術交流を展開することが出来ればと願う次第である。

最後にこの場をお借りして、本会議の開催に当り御尽力頂いた台湾側事務局の林良恭博士（台湾東海大学生物学系副教授）と李玲玲博士（国立台湾大学動物学系副教授）、特別に本会議に御参加頂いた郭宝章博士（元国立台湾大学森林学系教授）、さらに、予算面で全面的な御援助を賜った台湾行政院農業委員会、そして会議の会場を御提供頂いた台中市国立自然科学博物館の方々へ深く感謝の意を表したい。また、台湾の方々の原稿を翻訳する際に貴重なコメントを頂いた阿部永博士（元北海道大学農学部教授）に厚く御礼申し上げたい。

Tatsuo Oshida: Organizing the Japan-Taiwan scientific symposium 1998 on squirrels and flying squirrels.

著者：押田龍夫，〒060-0810 札幌市北区北10西8 北海道大学理学部附属動物染色体研究施設